

Glocal Tenri



4

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.4 April 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
なぜ環境の整備なのか
／永尾 教昭..... 1
- ・ 日本語教育と海外伝道 (33)
国際化の中での日本語教育④
／大内 泰夫..... 2
- ・ 遺跡からのメッセージ (68)
大和の文化遺産を学ぶ⑥—附属天理参考館の共同
展「天理 山の辺の古墳」
／桑原 久男..... 3
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (24)
20 世紀のライシテ②
／藤原 理人..... 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (28)
仏典翻訳の歴史とその変遷⑩
／成田 道広..... 5
- ・ 音のちから—中国古代の人と音楽 (新連載)
最古の楽官は、はたして靈獣だったのか
／中 純子..... 6
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観
と教えの伝播— (15)
5. コロンビアの体質⑥
／清水 直太郎..... 7
- ・ ヴァチカン便り (49)
法王の叱責
／山口 英雄..... 8
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (12)
／八木 三郎..... 9
- ・ 2020 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ
(6)
第5講：106「蔭膳」
／八木 三郎..... 10
- ・ おやさと研究所ニュース..... 11
新連載執筆のねらいと執筆者紹介／2020
年度宗教研究会／第338 回研究報告会
2020 年度「教学と現代」のご案内

巻頭言

なぜ環境の整備なのか

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

前号で、天理教の海外布教の場合、特に教会本部の出先機関とも言うべき拠点(伝道庁、出張所など)の環境整備が重要だと述べた。それは、海外の場合、教義の研鑽、信者の修練といった布教に不可欠なことを実施できるのが事実上、拠点以外にはないからである。

アメリカやブラジルには、多くの天理教の「教会」がある。ただ、天理教では「教会」とは、単に「宗教的会合のための建物」(広辞苑)を表す普通名詞ではない。「教会」とは、原則「所属するようぼく16人以上(うち教人5人以上)及び信者若干名を有する」(天理教伝道庁・海外教会規程第3条)礼拝施設を言う(国内の「分教会」も同様)。「ようぼく」とは、別席を9回受講し、さづけの理を頂いた者で、「教人」とは教人資格講習会を修了し登録された者を指す。

つまり天理教の場合、「教会」とは礼拝施設の等級をも表す。布教師が、未信者を信仰に導き、それが上記のような人数に達し、本部に承認されたら「布教師」が言わばグレードアップして「教会」となる。逆に施設の規模がたとえ大きくても、所属信者数が上記に満たない場合、教会ではない。教会となると最低つとめが勤修できる広さは必要だが、個人宅でも構わない。事実、特に海外の場合、筆者はすべて知っているわけではないが、多くは一般民家である(その国の法律で、一般民家で信者の会合が許されるかどうかは別問題)。

したがって、教会と言ってもそこにいるのは会長家族だけである。会長は他に生業をもっている場合もある。さらに会長家族のプライベートな家でもあるから、私的な生活の場であり、およそ公的な空間とは言えない。よって現実そこで信者の育成などは非常に難しい。

このように信者が教義研鑽する場を設けたり、いわゆる初心者が信仰を深めるようなプログラムを企画、運営できるのは、現実に拠点しかないのである。多くの教会長などは、導いた信者を拠点が運営する修養会や研修会に連れていき、そこで教理を深めるように促す。それゆえ、拠点のあり方、言い換えれば拠点の環境が非常に重要になってくると思われる。

日本国内でも、個人宅的な教会は実はたくさんある。しかし、大教会と呼ばれる教会(大教会も、面積的に大きな教会という意味ではなく、一つの等級を表す)、あるいは分教会でも、常駐ではなくても行事ごとにスタッフが集まること容易で施設規模もそれなりにあるところは多く、宿泊施設があるところも珍しくない。よって、そこで信者の研鑽などができる。また教会本部自体が、さまざまな信者育成プログラムを用意しており、そこでも可能だ。しかし、上に述べたように、日本以外の多くの国でそれだけの規模を持つ天理教の教会は決して多くない。さらに、高い旅費をかけて日本にある教会本部まで行くことも必ずしも容易ではない。

拠点が日系人コロニーのようになっていたり、雰囲気まさに日本そのものであれば、特別に日本趣味という人なら別だが、多くの非日本人、非日系人には入りにくく、結局、未信者が信仰の入口近くまで来ても、そこから奥に入っていくべきがない。

「あの天理教の信者はいい人だから」と、言わば人間関係から信仰に導かれることは悪いことではない。しかし、そうして導かれた人が確固たる信仰を胸に修めるためには、当然教理の理解を深めることが重要になるし、したがってそのために海外拠点が体制を整え、環境を整備することは大きな課題だろう。

国際化の中の日本語教育 ④

日本語教育文法

一般的に「文法」、あるいは「グラマー」という言葉を耳にしたら、「難解な、ややこしい、できれば避けたい」というようなイメージを持つ人も多いのではないだろうか。筆者も学生時代はそうであった。しかし、日本語教育文法というものに出会ってからは「目から鱗が落ちる」ように、わかりやすく理に適ったものだと思った経験がある。また日本語教師養成関係の授業を担当するようになってからも受講者から、「わかりやすい、どうして学校の国語の授業でこのように教えてくれなかったのだろう」という意見をもらったこともある。

具体的な例を挙げれば「未然、連用、終止、連体、假定、命令」などの活用や「五段活用、一段活用、」さらには「サ行変格活用動詞、カ行変格活用動詞」など品詞名も覚えさせられるような経験があったと思うが、うんざりした人も多いのではないだろうか。上に挙げた「未然、連用、終止、連体、假定、命令」を五段活用動詞の「読む」を例にすれば「読まない、読みます、読む、読めば、読もう」となるが、下線に注目すると、「ま・み・む・め・も」になっていることがわかる。これを「ない形、ます形、辞書形、假定形、意向形」のようにわかりやすい名称に変えて、「読まない、読みます、読む、読めば、読もう」と5つの形があるとすることで理解しやすくなる。さらにこの規則を「食べる」を例にすれば「食べない、食べます、食べる、食べれば、食べよう」のように活用が一段しかないとわかる。つまり「食べる」は一段活用動詞である。「サ行変格活用動詞」は動詞の「する」のことで、「カ行変格活用動詞」は「来る」のことでとシンプルに説明し、「する」と「来る」だけ活用の形が特別で、たくさんある動詞の中でグループが違うと説明するだけでも学習者の負担はかなり軽減される。「なんだ、そんなシンプルなことを難しく教えられていたのか」と思う人もいるかもしれない。しかし、日本人の日本語は自然に身に着いて文法を意識せずに運用している第一言語であり、外国人の日本語は文法を意識しながら習った第二言語であり、大きな違いがある。日本人はすでに身につけて無意識に使っている日本語をさらに磨きをかけるために国語の勉強をしているのだとも言える。そこから文法に関する考え方も「国語教育」と「日本語教育」とでは違いが出てくるのかとも言える。

日本語が運用できるレベルまで

縫部義憲編著『多文化共生時代の日本語教育』（渚々社、2002年）の「文法・文型の指導」の章で、関正昭は「日本語教育文法の勝負どころは外国人にとって難しい文法的意味や機能・用法をいかに的確に理解させ、運用の段階まで導けるかにあるのです。」(95頁)と述べているが、筆者も全く同じ思いである。往々にして日本語教師は文法的意味や機能・用法について辞書や文法書などを丹念に調べ上げ、教案に書き込み、学習者にもわかりやすいように既習の言葉に置き換えたりして“解説”に力を入れてしまうことがある。教師が正確に意味や機能・用法を把握することはもちろん重要なことだが、問題はそこから先で、学習者がそれを“運用”できるようにしなければ意味がない。日本語を使ってコミュニケーションが取れるよ

うになりたいのは学習者であり、教師のわかりやすい上手な解説を聞くのが目的ではない。日本語教師は今まで空気のように意識したことなく使っている日本語の文法的意味や機能・用法を意識して調べなければならず、教案を作る際にかなり時間を費やしてしまう。最近は参考書や教案集のようなものも出てきて、楽にはなっているとは思いますが、やはり丁寧に調べて自分の言葉やスタイルで教案を準備しなければならない。

あなたならどう答える？

日本が多文化共生時代に入り、日本語教育も多様化している現在、仕事として日本語教師をやっている人だけでなく、日常的に外国人に日本語を教える機会が増えるかもしれない。あるいは外国人から日本語について質問される機会もあるかもしれない。筆者は日本語教員養成の授業で「外国人が日本人によくする質問」を紹介している。パワーポイントでスクリーンに質問を映し出し、もし、このような質問を受けたらどう答えるかといくつかの例を出している。「『友達に会う』と『友達と会う』は同じですか。」「『行きたいです』と『行きたいんです』はどう違いますか。」などと提示し、まずは考えてみて、わからなければ隣の人と相談して、答えを考えるように指示している。教室の中がざわつくが、一生懸命考えてくれる。そんなことを考えたことがないという受講者もいれば、同じじゃないかと答える受講者もいる。全く意識したことがない部分を突かれたように皆、答えようがないと困っている受講生もいる。答えに関しては長くなるので割愛するが、日本語学習者からは様々な質問が来る。ベテランの日本語教師でも即答できず、「次の授業までによく調べて答えますね。」というように簡単には答えられないことを聞いてくることもある。今後、多文化共生時代で外国人が生活の中で日本語や日本文化について質問する機会が増えるかもしれない。当たり前が当たり前ではなく、丁寧に考えて答えなければならないことも起こり得る。

グローバルな日本語文法

『多文化共生時代の日本語教育』の「日本語教育用文法用語」の解説の中で、関正昭は次のように述べている。

今後、日本語教育が盛んになればなるほど外国人学習者には広く用いられていくことになるでしょう。ただ、それが外国人のためだけの日本語教育用文法用語にとどまってはならないと思います。これからはボランティア活動による日本語教室など草の根的な日本語教育の需要もますます高まっていくものと思われます。その中で、できるだけ多くの日本人が日本語教育用文法用語を知り、日本語学習の難しさとおもしろさを外国人と共有できるようになれば、現状ではまだ十分に市民権を得られていない「日本語教育文法」もグローバルな「日本語文法」として認知される日が遠からずやってくるのではないかと期待しています。(109頁)

日本語教育文法は外国人のためだけでないという意見に、筆者も賛成である。それは日本人にとっても学びやすく便利なものである。どの国の人も分け隔てなく理解できるというところに、もしかしたら人間が互いに立て合い、助け合って暮らしていくことができる大きなヒントがあるように思うのである。

令和3年2月6日～3月15日、天理大学附属天理参考館を会場にして、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、天理市教育委員会との共同展「天理 山の辺の古墳」展が開催され、天理市内の古墳から出土した副葬品や埴輪などの資料、計134



写真1 共同展の展示室風景

件461点が展示された。主催機関のひとつ、橿原考古学研究所附属博物館は、平成30年(2018年)12月23日から、老朽化した空調機器等の改修工事のため、約2年間の予定で長期休館中であり、平成31年(2019年)10月から、所蔵の優品を各地で巡回展示しているところであった。今回の共同展は、休館中の橿原考古学研究所附属博物館の所蔵資料の活用をはかると同時に、天理市教育委員会が発掘した資料や参考館の所蔵資料を合わせて展示することで、普段は離ればなれになっている天理市内の古墳出土資料が一堂に会する初めての機会となった。

展示室では、天理市内の地域別に、「南部の古墳」(大和・柳本古墳群)、「中部の古墳」(杣之内古墳群、石上・豊田古墳群、別所古墳群)、「北部の古墳」(東大寺山古墳群)、「低地部の古墳」(荒蒔古墳)という形で、順路に沿って資料が配列された。「南部の古墳」については、橿原考古学研究所が、戦後間もなく、双方中円墳として知られる櫛山古墳(国史跡)の発掘調査を行ったほか、1990年代に、中山大塚古墳(国史跡)、下池山古墳(国史跡)、黒塚古墳(国史跡)において埋葬施設の発掘調査を立て続けに行った経緯がある。とくに、平成9年(1997年)から翌年にかけて、発掘調査が行われた黒塚古墳は、三角縁神獣鏡33面と画文帯神獣鏡1面が出土した「世紀の発見」が有名で、天理市が整備した史跡公園内の展示館で、竪穴式石室の実物大復元と鏡のレプリカなどを見ることができる。しかし、出土資料の実物(国保有・重要文化財)は普段は非公開となっていて、今回、三角縁神獣鏡5面の実物が特別に展示された。また、櫛山古墳の腕輪形石製品や柵形埴輪、中山大塚古墳の鉄やり・円筒埴輪片・特殊器台片、下池山古墳の装身具類(石釧・勾玉など)などは、今回が初めての里帰りとなった。「南部の古墳」については、このほか、天理市教育委員会が西殿塚古墳、東殿塚古墳で発掘した埴輪類も目を引いた。とくに東殿塚古墳の船を描いた円筒埴輪は有名な資料ながら、ふだんは展示されることがなく、私が実物を最後に目にしたのは、平成27年(2015年)、天理市制60周年を記念した冬の文化財展「古墳の町天理」が天理市文化センターで開催された時だった。

一方、「中部の古墳」は、天理市教育委員会の所蔵資料を中心に展示が構成され、近年、発掘調査が行われた豊田狐塚古墳、豊田トンド山古墳の横穴式石室出土の各種副葬品のほか、平成30年(2018年)に新しく国の史跡に指定された西乗鞍古墳の埴輪、小墓古墳の木製品などが展示された。「中部の古墳」のなかでも、天理大学杣之内キャンパスに近接する杣之内古墳群については、

天理大学歴史文化学科が協力を行い、天理市と天理大学が共同で発掘調査を進めている東乗鞍古墳の埴輪片・土器片などを展示したことが特筆される。歴史文化学科では、企画展示室前のロビーで、西山古墳と塚穴山古墳の測量データを利用して作成した立体模型(約1/500)を展示するとともに、大学関係者による西山古墳、東乗鞍古墳の調査研究を紹介するパネルの掲示を行った。また、ロビーのスクリーンには、発掘調査中の東乗鞍古墳をドローンで撮影した映像を大画面で映し出し、墳丘の構造と周囲の景観を臨場観たつぷりに見ていただいた。

「北部の古墳」では、和爾町上殿古墳の鉄製武器・武具類が橿原考古学研究所附属博物館から初めての里帰りをしたほか、天理市教育

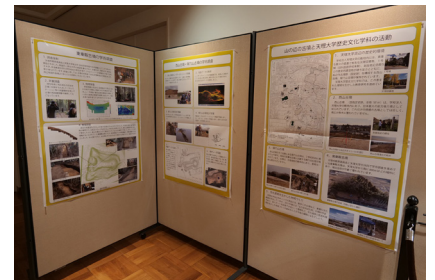


写真2 ロビーを利用したパネル展示

委員会から、赤土山古墳の家形埴輪や石製品などが展示され、円筒埴輪の出土状況を復元した模型がロビーで公開された。また、天理参考館が所蔵する東大寺山古墳の円筒埴輪が展示されたが、埋葬施設から出土した数々の副葬品(東京国立博物館所蔵・国宝)は里帰りをしなかった。せめて、有名な中平銘鉄刀だけでもレプリカを作成し、天理市内のどこかで展示するべきだろう。

さて、今回の共同展では、橿原考古学研究所とその附属博物館から初めて里帰りをした資料の数々に目を奪われ、また、人物や動物・建物などを象った荒蒔古墳の形象埴輪類など、天理市教育委員会の所蔵資料の充実ぶりに改めて驚かされることになった。しかし、残念なのは、天理市に、近隣の桜井市、田原本町、その他市町村のような文化財の常設展示施設がなく、貴重な文化財の数々が、ふだんは人目に触れることなくお蔵入りになってしまっていることだ。天理市文化センターで、夏と冬に開催される文化財展では、期間を限定した展示が行われているものの、物足りないと言わざるを得ない。初めて里帰りをした展示資料が多かったのも、天理市に常設展示施設がないことが原因のひとつになっている。

その点、杣之内町に奈良県が設置の準備を進めている「なら歴史文化芸術村」では、当初、天理市の文化財課の機能全体が移転し、常設の展示室も設けられる計画が示されていた。しかし最終的に、遺物整理室の業務の一部だけが施設内に移転する形となってしまった。今からでも何とかならないものだろうか。もし、それが無理なら、展示室を含む独自の施設を将来的に設置することを構想してみてもどうだろうか。場所は、「なら歴史文化芸術村」の近接地に天理市が整備した観光駐車場の敷地内が最適だろう。あるいは天理大学とタイアップして、それ自体が歴史的建造物である一号棟(旧天理外国語学校本館)のリノベーションを行い、その一部を天理市の文化財展示を行うスペースとして活用するといったことも考えられるかもしれない。今回の共同展を通して、多くの人が、天理市が誇る貴重な文化財が常設展示されていないことを残念に思ったはずである。観光資源ともなる貴重な文化財を、眠らせず、活用するための方策が求められる。

20世紀のライシテ②

天理教リヨン布教所長
藤原 理人 Masato Fujiwara

フランスのライシテの歴史において、2つの大戦間に大きくページを割くことはあまりないようである。もちろん、その間何も起こらなかったわけではない。むしろ表面に現れにくい変化が起こっていたと言えるかもしれない。

1920年代は、フランス語でグランド・ゲール (Grande Guerre、大戦争) とされる第1次世界大戦がようやく終わって、憂いのない雰囲気にも包まれた時代となった。「狂乱の時代 (Années folles)」とも呼ばれたこの時期、芸術のみならず、スポーツからファッションに至るまで、さまざまな娯楽文化が発展した。ファッションを例にとれば、「苦痛を伴う過去から着想を得るのではなく、何もかもを作り出した」時代であり、女性の身体表現や美意識が変化し、羞恥心が薄まって、過去の多くのタブーも破られた (エクスプレス紙のリンク参照)。こうした内面性の移り変わりに非宗教化の影響がないとは言えないと思う。人々の気分が高揚していた華やかな時代に、ささやかとは言えない精神性の変化があったのかもしれない。

しかしながら、1929年、アメリカでの株価大暴落が引き起こした大恐慌によって状況は一変する。

この世界的な不況はやや遅れてフランスに飛び火し、1930年代に入り本格的な経済危機が訪れた。1936年社会党の人民戦線 (Front populaire) が政権につき、3人の女性が政府の政務次官についたり、スポーツと娯楽対策の役職が作られたり、富裕層に限られていた有給休暇を労働者層にも適用したりと、現在にも通じる方針、政策を打ち出していく。しかしながら、経済危機からの脱却は果たせず、また対外的にもヒトラーのドイツが台頭する中、拳国一致が必要な時期に右派だけでなく左派からも反発を受け、国をまとめることができなかった。

そうした大戦間の雰囲気の中で、ライシテと宗教の共存が模索され続けていく。

「第3共和制の長い政治的経験のあと、1930年代のフランスでは、共和制という政治体制に異を唱えないという点では、右翼も左翼も共通していた」(竹岡) というのは政治上の指摘である。だがライシテにおいても、どんな信教信条があっても共和制を否定するという発想はこの時期にはもはや消え去り、1905年法で定められた政教分離の基盤が覆されることはなくなったと言えよう。いくらフランス大司教会議が「ライシテ関連法案の『無神論的性格』を非難し、『神の法』の絶対的優位についてこだわ」(谷川)、「ライシテの法律など法律とは言えないとフランスの司教たちが声高に宣言しても」(Baubérot)、世論はもはやそれについていかなかった。

仮にライシテの原則にそぐわないとしても、国家秩序や世論の安定を優先した節もある。すでに述べた1926年のモスクの建設にパリ市と国が補助金を拠出したことや、カトリック教会に対し新設礼拝場建設地の地代を年間1フランとし、99年間の賃貸契約を認めたことなどがその例と言えよう。

また教育現場では道徳科目などをめぐって教会側と左派教

員組合との間に緊張が走ったりしているが、先述の人民戦線内閣は反教権的というより自由主義的な教育政策をとって (谷川)、学校内での宗教的、政治的宣伝活動を禁止している (Baubérot)。

この時期に多くの社会的な進歩がみられたとはいえ女性参政権は実現されていない。カトリックの女性たちが女性参政権獲得のために運動を行うものの、反教権主義派がそれを阻んでいた (Baubérot)。伝統宗教のカトリックは保守派のイメージがあるが、もはや社会の構造は、保守対進歩という単純な対立構造ではなくなっていたようだ。

両大戦間の20年は、ライシテの観点でいうと、1905年法から第一次世界大戦を経てライシテが国民の意識の中で完全に共和主義に取り込まれていった時期とでも言えるだろうか。二つのフランスの利害争いではなく、よりよく社会にライシテを適用する方向で民意が収斂される土壌を築いた時期と言えるようにも思う。

第2次世界大戦が始まって間もない1940年6月、フランスはドイツに降伏する。第1次世界大戦では短期決戦を狙ったが結果的に4年の長きわたって戦い続けた。それに対し第2次世界大戦では、長期決戦を想定しながらわずか6週間で敗北する。

敗戦後に誕生したナチスの傀儡政権ヴィシー政府は、完全にカトリック寄りであったどころか、ライシテの原則に反する政府であった。フランスの衰退はライシテにあるとし、ユダヤ人の迫害や、市民の公職追放、フリーメーソンの解散など、宗教的、民族的に差別的な政策をとった。愛国心やキリスト教文明への回帰が説かれ、学校での宗教教育も復活した (Baubérot)。そして教会財産の返還、私立学校への補助金の助成、修道会の教育活動を禁止した法律の撤廃など、カトリック教会に有利な対策が取られた (谷川)。ただカトリックを優遇したとはいえ、政教分離の原則は崩さなかった。

第2次世界大戦中、なし崩し的に狂わされたライシテであったが、ナチスドイツの占領下という非常時でもあり、この時期に取られた政策で後に続くものがあるとしても、ライシテの大きな潮流を堰き止めるところまでは行かなかった。

そして、戦後、ライシテの原則が憲法に組み込まれることで、それをめぐる歴史も新しい時代に入って行くのである。

[参照インターネットサイト]

(リンクは2021年3月3日時点)

Jean Baubérot, *Histoire de la laïcité en France*, PUF, 2010 (pp.94-100)。

Michelle FAYET, *Le grand livre de l'histoire de France*, Eyrolles, 2014 (pp.372-399)。

谷川稔『十字架と三色旗』岩波現代文庫、2015年 (pp.256-261)。
竹岡敬温「1930年代フランスの主要政治勢力について」、『大阪大学経済学』Vol. 58-2 (https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/22979/oep058_2_246.pdf)。

"6. Les années folles," https://www.lexpress.fr/culture/livre/6-les-annees-folles_818957.html。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑪

鳩摩羅什の翻訳観

釈迦が説いた世俗否定の教えは、中国での受容過程で現世主義的に変容していった。鳩摩羅什の翻訳はその変容に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

彼の翻訳は創作であるとししばしば指摘される。中村元は「改変を施しているかあるいは彼自身の思想をもちこんでいる」(中村, 1995:181)とし、在家の維摩居士を主人公にして在家仏教の優位性を説く大乘仏典『維摩経』の中の一文に関して次のように指摘している。

チベット訳には、

「無明の汚れが尽きるがゆえに老死にいたるまでの汚れが尽きるがゆえに、それは縁起の必要である。如実にさとるがゆえに、それは一切の煩惱を死滅させる必要である。」

とあるが、この文章について見るかぎり、チベット訳文は現世的世俗的なものに対して否定的である。

ところがクマラージーヴァの訳はわれわれの生死輪廻のすがたを肯定している。すなわち「縁起がすなわち道場である。なんとすれば、無明から老死に至るまでの十二の支分が尽きることが無いから、諸の煩惱がすなわち道場である。なんとすれば、そこにおいては如実のすがたを知るが故に」としている。(中村, 1995:182)

このように鳩摩羅什は、諸々の煩惱によってこの世で迷う姿は悟りにつながるとし、それを肯定的に捉え、さらには現実的な迷いの世界をも肯定しようとしている。

またチベット訳で「王の快樂と主権とに対する欲を退けるが故に、諸王子の中でもすべての王子によって敬われる。」となる一文を、鳩摩羅什は「忠孝を示すがゆえに、諸王子の中でもすべての王子によって敬われる。」としている(中村, 1995:190)。チベット訳は欲望の否定を強調しているが、鳩摩羅什は中国的な「忠孝」という人倫関係における義務の肯定を強調している。『維摩経』のサンスクリット原文は残存していないため、原文に忠実であるとされるチベット訳と比較すると、鳩摩羅什訳には明らかに改変がみられる。

サンスクリット語に関して母語話者同様の感性を備えていた鳩摩羅什は、サンスクリット原文の理解が先行するあまり、自身の翻訳についてはかなり悲観的であったことが知られている。

天竺の國俗は甚だ文製を重んじ、其の宮商體韻は入絃を以て善しとす。凡そ國王に覬ゆるには必ず徳を讃ずることあり。見佛の儀は歌歎を以て貴しとなす。經中の偈頌は皆その式なり。但し梵を改めて秦となさば、その藻蔚を失す。大意を得と雖も殊に文體を隔つ。飯を嚼んで人に與ふるが如し。徒らに味を失するのみに非ず。乃ち嘔噦せしむるなり。(横超, 1958:16)

鳩摩羅什はこのように述べ、サンスクリット原文の偈頌など、その文体が有する美的感覚は変換不可能であり、翻訳するとそれはご飯を咀嚼して人に与えるかのごときで、味もなく嘔吐を催すとしている。また彼は「語現はれて理沈み、事近くして旨遠し」(横超, 1958:16-17)とも述べ、巧みに表現してもかえって真理を覆つたり、直訳しても原文の本旨から遠ざかったりすると指摘した。

彼は翻訳不可能論を前提として、あくまで大意の通達を旨とし、たとえ原文と異なっても、受容されうるものを伝えること

に専念していたと考えられる。実際、彼は『摩訶般若波羅蜜経』の注釈『大智度論』の翻訳の際、中国では煩瑣よりも簡素が好まれるとの理由から、原文の三分の二を削除して百巻に翻訳した(木村, 1997:254)。彼は漢語の伝統を重視する漢人沙門の意見を採用し、より洗練された漢訳を生み出そうとした。

上述の鳩摩羅什の指摘は、翻訳の限界を一番近くで体感する翻訳者がしばしば味わう感覚である。原文の理解と二言語の能力が卓越すればするほど、克服不可能な差異が可視的になる。翻訳を生み出しつつも、嘔吐を催すとしてそれを忌み嫌う葛藤は、翻訳者の宿命でもある。

さて、鳩摩羅什は訳経史に功績を残した偉大な訳経僧としての顔とともに、実は破戒僧としての顔も併せ持っていた。

前秦の將軍呂光の捕虜となった彼は、不遇の時を過ごす中で呂光に弄ばれることがしばしばあった。ある時、彼は酒を飲まされ密室に女性とともに幽閉されたという(丘山, 2010:165)。その結果、やむなく女性と通じ、鳩摩羅什は破戒僧の烙印を押されることになった。それはちょうど出家者であった彼の父、鳩摩羅炎が龜兹国で王女に請われ破戒して結婚した姿にも重なる。さらに鳩摩羅什は授かった子供を王との博戯により殺害されるという悲惨も味わっている。受戒しながら皮肉にも自らの行いによって父と同じく破戒僧となり、世俗的な生活の中で辛苦と失意を経験した境遇と、その渦中において醸成された信仰心が、より多くの衆生救済を説く大乘仏教へと彼を駆り立てたのかもしれない。

『出三蔵記集』卷十四鳩摩羅什伝には、「譬えば臭泥の中に蓮華を生ずるがごとし。但だ蓮華を採りて、臭泥を取る事勿れ」という彼の言葉が残されている。蓮華を指す語はサンスクリット語でいくつかあるが、そのうちの一つ Pankajam は Panka(泥)と Jam(誕生)の複合語で、泥の中から生まれるにも拘らず泥に沈むことなく、一切泥に汚されることもない清らかな蓮華を比喩的に意味する。彼は破戒僧としての自己を臭泥に譬え、漢訳の過程で自身が苦悩を経て紡ぎ出した訳文を、臭泥から生まれる美しい蓮華に譬えている。破戒僧の汚名を背負いつつ、大乘に救いを求めて仏典漢訳に身命を賭した彼の悲哀と敬虔な信仰心がその言葉に滲み出ている。彼にとって翻訳とは、伝道のための営みであると同時に、自己の救いに直結する信仰実践だったのではないか。当然ながら彼の翻訳観は、自身の経験と思想に基盤を持っており、失意と苦悩によって醸成された自身の信仰から大きく影響を受けていたと思われる。

宗教文献の翻訳の場合、翻訳者の信仰は翻訳に大きな影響を及ぼす。時として原文よりも影響力を持つ「聖なる言葉」の訳文には、原文に内包された真理の蘇生に挑む翻訳者の求道の問題と信仰の息吹が宿っているといえよう。

[引用文献]

横超慧日「鳩摩羅什の翻訳」『大谷学報』37巻4号通号136号、1958年。

丘山新「鳩摩羅什の破戒と訳業をめぐって」『新アジア仏教史06 仏教の東伝と受容』佼成出版社、2010年。

木村宣彰「羅什と玄奘」高崎直道他編『仏教の東漸 東アジアの仏教思想 I』春秋社、1997年。

中村元『中村元選集第21巻 大乘仏教の思想』春秋社、1995年。

最古の楽官は、はたして靈獣だったのか

文献資料による音楽の探求とは

筆者は、古代の中国音楽を、文献資料をもとに研究してきた。もちろん、文献資料のみで、すべてが理解されないことはわかっている。ただ、文字として記録されたものは、それが伝承されていくなかで、過去の事実として認識されて、後世の人の感受性や生き方に影響するのは確かだと思っている。だからこそ、ここで中国の古代人が残した記録にあらためて向き合っ、音への感性や、音楽に対する認識が、どう表現されていたのかを考えた。それは確かに当時の彼らがどう生きて、なにを感じ考えたかの反映ではある。しかし、それを読み解くなかで、今を生きる我々にもつながるものを見出し、音の世界をあらためて見直す契機を得られるのでは、と密かに期待している。

最古の楽官

連載の最初に、古代の経書『尚書』^{しやうしよ しゆんてん}舜典のなかにみられる最古の楽官のもつ偉大なちからについての記載を見てみたい。『尚書』は孔子も「書」として言及しているが、経書と定められたのは前漢の武帝のとき（前136年）である。

皇帝の舜は夔に「なんじは音楽を生業にして我が後継ぎに教えよ」と命じられた。剛直だけれど温和であり、寛容だけれど怖れさせ、強くても残虐ではなく、あっさりしていても傲慢ではないという、均整のとれた人間に導くことができるのが音楽である。詩とは自らの心のうちを表出したもので、歌とは表出されたものを詠じたもので、声（宮・商・角・徴・羽の五声）とは詠じたものに依ってなりたち、律（六律・六呂の十二律）とはその声を調和させるものである。すべての楽器が整い調和すれば、人はたがいに奪い合うこともなく、神と人とが和合するのである。夔は「わたくしが石を打ち鳴らしますと、百獣がともに舞い踊ります」と言った。（帝曰夔命汝典楽教胄子。直而温、寛而栗、剛而無虐、簡而無傲。詩言志、歌永言、声依永、律和声。八音克諧、無相奪倫、神人以和。夔曰於予擊石拊石、百獸率舞）

舜が夔という名の楽官に命じた内容から、当時音楽がどのように崇高なものとして捉えられていたのか、その音楽を掌る楽官が人並優れた技量を持つものであったことが見えてくる。舜が大切な後継者にわざわざ音楽教育をほどこすのは何故か。それは音楽が心を養うと考えたからである。剛直と温和な性質は、どちらも大切ではあるが、正反対である。しかし音楽はそれをうまく調和させる。他人への寛容さと畏怖の念を起こさせるような態度も、どちらも為政者にとって必要である。音楽はそれを偏りなくさせる。さらに強さが高じると残虐にもなるし、他人にクールな態度が高じると傲慢にもなる。しかし音楽はそのように極端に陥るのを回避させる。こうして整った音楽は「神と人とが和合する」という理想を実現すると考えられた。夔が、自分が石を打ち鳴らすと百獣がうち連れて舞うと返答しているのは、音楽のちからが異類へも及ぶことを示したものだろう。素晴らしい音楽の役割とは、どんなものなのか。古代人が考えていたことがここに端的に示されている。

靈獣としての夔

さて、興味深いことに、「夔」というのは、『山海経』大荒東

経によると靈獣（図）の名なのである。ちなみに『山海経』は、前漢にはすでに存在した作者不明の空想的な地理書とされる。

「東の海に流波山という山があり、ここから七千里の海のかなたである。

その山には牛のようで、身体は蒼くて角がなく、一本足の野獸がいる。その野獸が海に入ると必ず風雨が起り、日月のような光を放ち、雷のような声を出し、夔という名である。黄帝はその野獸を捕獲して、その皮で鼓をつくり、雷獸の骨でそれを打つと、その音は五百里まで響き、天下を驚かせた。」（東海中有流波山、入海七千里。上有獸、状如牛、蒼身而無角、一足。出入水則必風雨、其光如日月、其声如雷、其名曰夔。黄帝得之、以其皮為鼓、橛以雷獸之骨、声聞五百里、以威天下）

『尚書』舜典の楽官の名と靈獣が同名というのは偶然ではなく、音楽を掌る特別なちからを持つ存在だからこそ、黄帝（舜より前の伝説上の最初の皇帝）が捕獲した靈獣にちなんだ名が付けられたと考えられよう。面白いことに、古代においても、この権威ある『尚書』にみえる卓越した楽官と、不思議な獸が同一のものであるかどうか、その解釈に悩む王がいた。『呂氏春秋』^{りよし しゆんしゅう}慎行論の察伝の条には以下のようにいう。

魯の哀公が孔子に尋ねた「楽官の長である夔が一本足というのは、本当ですか」と。孔子は言った「むかし舜が音楽を天下に教えようとして、重と黎という臣下に在野の夔というものを推薦させた。舜は彼を楽官の長にした。そこで夔は六律を正して五聲と調和させ、八風に通じたので、世の人々は大きに夔に信服した。重と黎はさらにほかに夔のような者を探し求めた。舜がいうのには「楽は天地の精であり、物事の得失の節である。だから聖人だけがよく調和させられるのだ、これが楽の根本である。夔はよく調和させ、そこで天下が治まった。夔のような者は一人で十分である」と。だから夔は一人で足ることであり、一本足であるというのではないのだ」と。（魯哀公問於孔子曰、樂正夔一足、信乎。孔子曰昔者舜欲以樂傳教於天下、乃令重黎舉夔於草莽之中而進之。舜以為樂正。夔於是正六律和五聲、以通八風而天下大服。重黎又欲益求人。舜曰夫樂天地之精也、得失之節也。故唯聖人為能和、樂之本也。夔能和之、以平天下。若夔者一而足矣。故曰夔一足、非一足也）

『呂氏春秋』（前239年成立）は、魯の哀公の質問に答える孔子の言を借りて、一本足の野獸である夔と楽官の夔とをここでははっきりと違うものとした。「一人で足る」とは牽強附会のようなのだが、音楽のもつ計り知れないちからを導き出す楽官を、靈獣ではなく、人間として説明した。楽官か靈獣か。夔をめぐる言説には、まず、靈獣の威力が、すぐれた能力をもつ最古の楽官に重ねられたことが示されている。そこからさらに、不可思議なものに悩みながらも、なんとか納得できるように解釈する古代人の姿が垣間見えて親しみがわいてくる。



5. コロンビアの体質 6

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

5.2 国民性のある程度の共通項

地理的な各地域の多様性の知識が分かったところで、人間を観察してみたい。とはいえ、日本人とは、米国人とはという定義は大変難しい。ただ「ケンミンショー」のようにある共通項はこういうタイプのような、というぐらいのことにしておきたい。例えば、「日本人」というと、集団主義、時間厳守、保守性、全員一致優先、年功序列意識（先輩・後輩）、世間体意識、などが挙げられるのではないかな。

さて、コロンビアに関しては、地域性に関係無く北から南まで、また人種的にも関係無く「ザ・コロンビア人」という国民性を探ることにする。しかしながら、誤解しないで頂きたいが、「こういう傾向が多い」という数や類型が存在する、ということだけなので、以下に記述することは、決めつけや先入観など、コロンビアやラテンアメリカの人たちに対する「ステレオタイプ」的見方は避けつつもりである。「〇〇人は～」という一般化は、ともすればレッテルを貼ったり、固定観念を作り上げたりして、最終的に偏見や差別的思考が生まれる可能性もあるからである。

*よく言われている性格的要素

コロンビア的（ラテン・アメリカ的）な性格は、1) 個人主義、2) 陽気（明るい）、3) 約束を守らないことが多い、4) 時間厳守ではない、5) 下心がある、6) 賢明、すばしっこい、鋭敏、7) 宗教に敬虔である。8) 見た目大事、見栄っ張りである、9) おもてなしの心がすごい、10) 仲間意識がある。このように羅列してみたが、個人レベルでいうと、こういう性格の人間は国籍や地域に関わらずどこにでも存在していると察する。要は、程度と数の問題で、「〇〇という人が多い」ということである。再度断っておくが、「個人主義が悪いとか良いとか、集団主義が云々」という優劣は一切しないのでご理解いただきたい。

*個人主義について

「私たち、コロンビア人は骨の髄まで個人主義者である⁽¹⁾」とあるように、コロンビア人は他のラテンアメリカの国と比べても個人主義の割合が高いと言える。個人主義が目立っているのは、例えばサッカーのゲームでも見られることである。「ヨーロッパのチームはチーム全体で作戦を練り試合を運ぶが、南米のチームは個人プレーが多い」ということをよく耳にする。ある新聞にはこういう事が掲載してあった。「コロンビア（のサッカーは）チームでプレーしていない。どんな手段を用いても勝つという一つの目的をもった選手たちのグループだが、それは



エクアドル vs コロンビアの試合

<https://www.futbolred.com/seleccion-colombia/ecuador-vs-colombia-galeria-de-la-derrota-en-eliminotorias-sudamericanas-127445>

先日のエクアドルナショナルチームとの試合で明らかにされた。⁽²⁾ この記事はコロンビアのチームプレーの悪さを酷評している。結果では6対1でコロンビアが負けたの

だが、やはり、個人プレーでの優れた選手が活躍するより、サッカーはチームプレーが大事ということを言及していた。

コロンビアで少しずつ個人主義化が強く進行しているという記事もある。

「私たち（コロンビア人）はますます個人主義になっています。それはコミュニティ活動の参加の度合いによって表れています。たとえば、12歳～17歳の53.7%、18歳～44歳の65.3%、45歳～59歳の60.5%、そして60歳以上の60%の人たちが共同体や公共の活動に参加していない⁽³⁾」。

けれども、「個人主義」に反対の意見も存在している。ある大学教授は次のように指摘する。

「コロンビア人は、協力することと競争することを同時にやっつけて見せている。それは、私たちが思っているほど個人主義ではないという証拠であり、私の研究調査では、ビジネスの生産性においても、小さなグループの協力態勢で利益を上げている結果も出ている⁽⁴⁾」。

なお、コロンビアで50年以上過ごしたタケウチ・ユウという日本人の大学教授が、日本人とコロンビア人との性格を分析している。

「一人のコロンビア人は一人の日本人よりも優れており賢い。しかし二人の日本人は二人のコロンビア人より賢い。なぜならこの二人のコロンビア人は、彼ら同士で本能的に不信感をいだき、距離をおくのに対し、日本人二人は連帯して、協力し、力を融合して各人の能力を強化するからである⁽⁶⁾」

コロンビアの名誉のためにも言うておくと、コロンビア人の個人主義について、強いかもしれないが、ひとたび目的をもって合力で行うことが決まれば、猛烈に協力し、一つの目的に向かってそれぞれの能力を結集して遂行する集団性は持っているのではないかと筆者は思う。

天理教コロンビア出張所創立40周年（2012）の祭典を迎えるにつき、コロンビア人の合力、つまり、彼らが集団主義を持っていることを目の当たりにした。壁を塗る人たち、電気・水道の管轄関係の人たち、はたまた造園業者、アトラクション係、演芸、食事関係や出し物の女性たち、それぞれが「創立記念祭」に向けて動いてくれた。途中で来なくなってくるのではないかと危惧したが、そんなこともなく、みんな最後まで頑張ってくれた。そこに感じたのは、コロンビア人の底力であった。

[参考文献及びURL]

- (1) Germán Puyana García, “Los Colombianos,” Panamericana Editorial, 2005: 39.
- (2) <https://diariolalibertad.com/sitio/2019/11/colombia-ganomas-por-la-individualidad-que-por-el-esquema-de-su-juego/>
- (3) <https://www.minsalud.gov.co/Paginas/Colombia,-una-sociedad-cada-vez-m%C3%A1s-individualista.asp> 健康保険省「コロンビア、より個人主義化する社会」
- (4) <https://www.urosario.edu.co/Home-V3/Investigacion/Divulgacion-cientifica-Ed-03-2019/Economia-y-Politica/Los-colombianos-no-son-tan-individualistas-como-se/>
- (5) 1927年生まれ。東京大学で物理を勉学。1959年コロンビア国立ナショナル大学で数学の講師として他の三名の日本の教授とともにコロンビアに来ている。
- (6) Germán Puyana García: 40.

高位聖職者に対する叱責

ヴァチカンの公会議で採決された事柄に従わなかったり、実施しなかったりすることは、教会の規則に従っていないということの意味する。とくに現法王は、すでに5年前に、公会議で決まったことを実施するように勧告している。しかしこの5年間何も改善されていないのだ。

法王は、1月30日のイタリア司教会議の教理問答取り扱い事務所で、次のように述べた。

あなたがたは教会の中で活動する以上は、公会議で採決されたことに従わねばなりません。もし、自分の都合のいいように解釈するのであれば、教会の中にいることにはならないのです。その点で、私たちは自分自身に対して厳しくあらねばなりません。教会の中には絶対的に相容れない者や、第二ヴァチカン公会議の議決を受け入れない者、さらに歴史をさかのぼれば、古い教義だけにに基づき行動しようとする者が存在してきました。第一ヴァチカン公会議のあと、その議決に不満をもった神父や一般信者の中には真のカソリック信者であるという信念を持って、離れていったものもいました。……教会の教えを無にして信仰を続けることはできません。教えに沿わない教理問答を前面に出しても、話にはならないのです。

法王はイタリア人の司教たちに、「今まさに歩みを進める時だ」と述べ、世界宗教会議の件については2005年にフィレンツェで、その推進について語っている。また、国家主義とポピュリズムの台頭を心配した法王は、「公共の話し合いの中で、内側から出てくる強硬な意見に対し、明確な返答を行うこと」を願った。しかし、これに対して、何も動きはなかったし、だれも動こうとしなかったのだ。「5年経った今、イタリアの教会は、フィレンツェで行われた会議の時に戻らねばなりません。国民的宗教会議の理念に基づいて、共同体のための共同体、司教区のための司教区を作らねばならないのです。」

法王は、5年前と同じようなことを、2年前にもローマの神父たちに話しているのだ。しかし、神父たちは、ただ単に「まあ、何とすばらしかったか」、「素晴らしい話だった」、「法王は話が上手だ」と語り合っただけであった。彼らに「5年前の法王のフィレンツェの話はどうだったか」と問えば、「実は話を少しも思い出せない」、「話はどこかに消えてしまった」と答えるだけである。

イタリア人の宗教意識

トリノ大学で宗教社会学を教え、長い間、イタリア社会における宗教的現象を見つめてきた、フランコ・ガレリ元教授(75歳)がまとめた現代のイタリア人の宗教観を紹介したい。調査範囲は、18歳から80歳までの3,200人を対象にしている。

100人中75人が「絶対者」の存在を認めている。25年前は82名だった。宗教が人間の生命に関する奥深い意義を教えてくださいと思う者は、65人となった。25年前は82名だった。日曜日の教会のミサに出かける人は、以前は80名であった。そのうち毎日曜日に絶対に出かけるというのが30名だった。今は20人にまで減ってしまった。信仰を求める人は、単純な人とか、未熟な人と思う者が今は23人である。25年前、そう思う者はわずかに5人だけだった。イタリア人の100人中の

76人が自分をカソリック信者と考えているが、以前は88人だった。かつて使徒たちが生きたように自分も生きようとしている者は30人である。以前には41人もいたのだ。

宗教学者フランコ・ガレリの目に映ったのは、「宗教心のあまりない人たち」である。新聞記者との1問1答を記そう。

(問) イタリアの状況はどうですか？

(答) この25年間にカソリックを信じないものが30%増加しています。ところが他の信仰では、2%から8%程度に過ぎません。カソリックは疲れていると言えるでしょう。1998年の時点ですでに、ミラノのカロロ・マリア・マルティーニ枢機卿はカソリックを4つのグループに分けました。それは「樹液」「幹」「樹皮」「麝香」です。第一の「樹液」は22%、第二はいつも活動していないがカソリック信者でこれは30%、第三が伝統や文化のために「樹皮」に食いついていたのが44%、第四が何らかのカソリックの信条を信じているのが4%です。

(問) ともあれ無神論者が増加したんですね。

(答) まあ、他の国ほどではないですが、イタリアでは何かことがあれば、教会に走る人がまだ多い。珍しいことには、運命の世界に生きるのではなく、自分の選択の世界に生きていていると思っています。

(問) この25年間に何がそうさせたのでしょうか？

(答) 宗教的实践が非常に少なくなったことです。儀式的受容は個人の自由に任されています。信じる者は、信じることは疲れることであると知っています。何も信じないものは、信じないことは浮かれることであることを知っています。そのような相関性があるようです。

(問) 無神論者、不可知論者が増加しているということでしょうか。

(答) それは、18歳から34歳の間に一番多い。次が35歳から40歳です。彼らは、神は存在しないと宣言しています。信仰のないところに祈りはなく、精神生活もないと言います。

(問) 教会で「結婚式」をあげるのが2018年より減少していると言いますが。

(答) そもそも「式」それ自体が、対社会的なものから、個人的なものになって来ているのでしょう。

(問) 46%が給与の1000分の8を寄付することを反対していると言いますが。

(答) それは社会福祉が向上していることにも関係があるでしょう。

(問) 20%が避妊の非合法性を訴えています。

(答) 逆に言えば80%が避妊を受け入れている。これはいろいろな条件を考えれば領けることだ。

(問) 63%が「安楽死」を認めています。

(答) 賛成者はこの25年間で、2倍になりました。賛成者100人のうち、76人までがカソリック教徒です。しかし、より精神的(霊的)な者は反対が多い。「代理母」つまり、他の女性の「子宮」を借りての妊娠の賛成者はわずか20%です。

(問) ヨーロッパでは戦争のない年が、75年続いています。もっと続くのでしょうか？

(答) 今我々はCOVID-19と戦っています。2月末の調査では、新型コロナウイルスの感染拡大の収束を願って、20%の人々がいつそう祈るようになりました。

「碍」の字表記問題再考 (12)

2012年5月29日の衆議院第180回国会において、内閣総理大臣宛に「碍」の常用漢字への追加に関する質問主意書が提出されている。これに対する政府の回答は、「漢字使用の目安である常用漢字表の字種は、その漢字が一般の社会生活において頻繁に使用され、他の熟語の構成要素ともなっていることを基準として選定されており、全ての常用漢字は、その基準に合致している。「碍」については、文化審議会によって当該基準に合致していないと判断され、常用漢字表の字種として選定されなかった。」と説明している。

2010年に常用漢字表の改訂が行われているが、その際の改訂思案に対する意見募集では、「戦前は常用漢字として使用されていた。碍の字を復活させるべき」との声が数多く寄せられたが、結果として「碍」は追加されなかった経緯がある。

明治時代の漢字政策

中国で誕生した漢字がわが国に伝来したのは4世紀頃といわれている。その漢字が日本語として定着し、使いこなされるようになったのが7世紀頃のものである。わが国最古の歴史書といわれる『古事記』や『日本書紀』は漢字で表記され、中国とは異なる漢字表記の文化が確立されている。漢字は日本語の表記において、表音文字のひらがな、カタカナと同様に重要な文字の一つである。

明治時代以降、「富国強兵」に力を注ぐわが国は教育による人材育成を急務とし、国語施策は重要な課題であった。その流れのなか、1902年(明治35)3月に「国語調査委員会」を創設している。わが国の漢字は中国を手本とするものの、その中国での漢字数があまりにも多く難解であるため、国語施策のなかで漢字制限論を打ち出している。特に小学校教育における国語の仮名遣いや漢字をわかりやすい簡易なものにすべきという方針であった。

1908年(明治41)5月に政府が告示した国語施策に関する資料の『漢字要覽』には、次のような文章が記されている。

凡例

- 一 本書ハ、漢字ニ關スル大體ノコトヲ知ラシムルヲ以テ目的トシテ編纂セリ。
- 一 本書ハ、現今ノ中等教育程度ニ於テ必要ナル範圍ニ止リ、固ヨリ専門學者研究ノ爲メニ著シタルモノニ非ザレバ、成ルベク簡易ヲ主トシテ、詳密ナル議論ハ、總ベテ之ヲ避ケタリ。
- 一 本書ノ例ニ擧ゲタル文字言語ハ、總ベテ普通ニ用キルモノニ就キテ大概ヲ示シ、ソノ奇僻ニ涉ルモノハ之ヲ取ラズ。

漢字ノ創製及ビ構造

文字ハ、言語ニ代ヘテ思想ヲ外ニ表ハシテ、之ヲ人ニ示シ、之ヲ後ニ傳フル所以ノモノナリ。(略)

漢字ノ數ハ、世ヲ逐ウテ次第ニ増益シ、歴代字書ノ主ナルモノニ就キテ之ヲ算スルニ、漢ノ説文ニハ、九千三百五十三字アリ、梁ノ玉篇ニハ、二萬二千七百二十六字あり、明ノ字彙ニハ、三萬三千一百七十九字アリ、清ノ康熙字典ニハ、四萬二千一百七十四字アリ、康熙字典ニ至リテソノ數尤モ多ク、補遺備考ニ取メタルモノヲ合スレバ、四萬八千六百四十一字アリテ、ナホ全ク遺漏ナシトイフベカラズ。サレドモコノ中ニハ、同一ノ文字ニシテソノ體ノ異ナルモノアリ、音アリテ義ナキモノアリ、音義共ニ詳ナラサルモノアリ、書籍上ニ於テハ殆ド使用セラレタル例ナコモ

アレバ、コノ數萬ノ文字ハ、盡ク世間ニ通行セシニハ非ザルナリ。説文ヨリ以下、ミナ部門ヲ分チテ文字ヲ取メタレドモ、今日普通ニ行ハルモノハ、字彙字典等ノ分類ナリ。ソノ法、楷書ノ字體ニ就キテ、ソレゾレノ偏旁冠脚ニヨリテ部門ヲ分チテ、文字ヲ取メタレドモ、今日普通ニ行ハルモノハ、字彙字典等ノ分類ナリ。

まず、「凡例」に記されていることは、中等教育程度では簡易な漢字を主として扱うこととしている。「漢字ノ創製及ビ構造」では、中国の漢字に触れ、漢字文化の中国では、漢の時代の字典に収められている漢字の数は、9,353字、梁の時代には22,726字、明の時代では、33,179字、そして清の時代の『康熙字典』には48,641字などと膨大な数になっていることをあげている。それらの漢字は必ずしも普通の生活上には不要な漢字も含まれていることを指摘している。そして、漢字の字体を左右、上下の部分に分解し、偏、旁、冠、脚などと呼称し、漢字を構成する要素をそれぞれ分けて説明している。

日本語表記における漢字はできるだけ簡易なものにすることを明治政府が定め、その方針は今日まで踏襲されている。現在わが国の漢字はその考え方にに基づき、日常で使う常用漢字として標準化している。常用漢字とは、わが国の「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安」として政府より示されたものを意味する。

常用漢字の変遷

1908年の『漢字要覽』では「漢字ノ變遷及ビ字體」という項目があり、そこにはそれぞれ部首に分けられた漢字が示されている。その中で障害を表す漢字として掲載されているのは、「聾」「啞」「瞽」「癩」などである。「碍」の字は見当たらない。

次に、1919年(大正8)12月に文部省国語調査室から『漢字整理案』が出されている。そこでは耳の部で「聾」、口の部で「啞」、目の部で「盲」の漢字がそれぞれ掲載されている。石の部の漢字としては、「砂、硫、碑、磨、碗、砲、硬、碓、磯、碼、破、硯、確、礎、研、碁、磁、礦」などがあげられている。ここに障碍の「碍」の字はない。

その後、政府より出された最初の漢字制限案が1923年(大正12)5月の『常用漢字表』である。漢字1,963字とその略字154字であった。この常用漢字表では、日本語の表記に関して次のように制限が示されている。

凡例

- 一、本表にない漢字は假名で書く。
- 二、固有名詞には本表にない文字を用ゐても差支ない。たゞし、外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること。
- 三、代名詞、副詞、接續詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書く。
- 四、外来語は假名で書く。

『常用漢字表』に掲載されてない漢字については、仮名で書くように指示している。また、『漢字整理案』に含まれていた「聾、啞」の漢字はなく、「盲」だけが載っている。石の部については、「石、砂、砲、破、研、硬、硯、碁、碎、碑、確、磁、磨、礎」の14字となっており、ここでも「碍」の字は見当たらない。

[引用・参考資料]

文化庁 <https://www.bunka.go.jp>

第5講：106 「蔭膳」

1. はじめに

この逸話は明治15年、教祖が奈良監獄署に御苦勞下された時の話である。逸話に登場する主な人物は梅谷四郎兵衛（以下四郎兵衛）と妻のタネの2人である。

内容は、教祖が10月29日から11月9日までの12日間奈良監獄署に御苦勞された時、お屋敷に滞在していた四郎兵衛が朝暗いうちから起きて、教祖に差し入れを届けるために毎日通い続けたことが記されている。そして、四郎兵衛は毎日差し入れを届けるだけで、教祖には直接お目にかかることもできなかったにもかかわらず、教祖はそのことをご存知であった。また四郎兵衛の妻タネは、教祖の御苦勞をしのんで大阪の自宅で毎日蔭膳を据えて給仕をさせて頂いていたが、このタネのことも教祖はご存知であった。その後、教祖にじぎぎにお伺いできるようなお許しを頂いたという逸話である。

この逸話から我々信仰者は何を悟るのか、加えてこの逸話を拝読した一人ひとりはどうのように読み解き、そして自らに何を問いかけるのか、そのことを思案しながら話を進めた。

2. 蔭膳の意味

この逸話の題目である「蔭膳」についてであるが、この言葉は天理教独自のものではなく、一般的に使われている言葉である。『広辞苑』によると、「旅に出た人の安全を祈って、留守宅で用意して供える食膳。」と書かれている。『浄土宗大辞典』には、「家を離れてしばらく還ってこない人のために、不在中も食事を調べ膳を据える習俗。家族の一員が旅や兵役などに出たとき、または遭難の際には無事を祈って、留守宅で家族が膳を供える。太平洋戦争の出兵時には、蔭膳を供えることが全国的に行われた。」と記されている。ここでは「兵役」「出兵」という言葉が記述されているが、これは歴史的な事柄であり、第2次世界大戦、太平洋戦争でお国のために戦争に出て行った人のことを思い、どうか無事で、危ない目に遭わないようにと留守宅を守る人が願って、陰ながら食事を供えたことを意味している。辞典によって文言こそ違うものの、「蔭膳」のおおよその意味は、「旅などに出た人の無事を祈って、留守宅の人が供える食膳のことを言い、宗教的な意味としては神仏の力、神秘的な力で身を守ってもらえるように祈り、願って供える食膳」という意味になる。

3. 梅谷四郎兵衛と妻タネについて

四郎兵衛は弘化4年（1847）7月7日、現在の大阪府羽曳野市で梅谷久兵衛門、小きんの三男「勝蔵」として誕生している。万延元年（1860）、14歳のとき、親戚筋の「左官四郎」の屋号を持つ浦田小兵衛の養嗣子となる。それ以降、四郎兵衛を名乗る。明治4年（1871）5月、上野たねと結婚。入信は、明治14年である。そのきっかけとなったのが、内障眼を患う実兄梅谷浅七である。左官の弟子である異徳松の父親と雑談中に「大和の生き神様」の話聞き、おぢばに行くことを決意。同年2月20日、異徳松とともに参詣する。「取次」から聞く話に感動し、入信することになる。10日後には7、8名を連れ

ておぢばに帰り、3度目には同行者30名という驚異的な信心ぶりの四郎兵衛であった。その後、「明心組」の講名を拝戴し、講元となっている。入信直後からおぢばに勤め、明治14年5月14日の「かんろだい」の「石出しひのきしん」、明治16年の「御休息所」の建築では生業の左官の技術のもとに「壁塗りひのきしん」を行っている。明治15年の毎日つとめのとき、初めて「おつとめ」に出る。明治16年教祖が御休息所にお移りなされた後、「赤衣」を頂かれ、明治20年5月16日には「息のさづけ」を拝戴している。明治22年1月15日、船場分教会（現、大教会）設置のお許しを得て、四郎兵衛は初代会長となっている。

次に、梅谷タネであるが、嘉永3年（1850）8月4日、上野早蔵、やすの長女として誕生し、明治4年（1871）21歳のときに四郎兵衛と結婚している。明治14年の入信の際、四郎兵衛が長兄のそこひの平癒のため、「おやしき」に帰り、教祖から「夫婦揃うて信心しなはれや。」と頂いた言葉をもとに、「この道というものは、一人だけではいかぬのだそうであるから、おまえも、ともどもに信心してくれねばならぬ。」という四郎兵衛の言葉にタネは素直に従っている。そして、茶碗に水をいれて「おぢば」に向かって、「なむてんりわうのみこと」と3遍唱えて、その水を分けて飲み、誓いの印にしたといわれている。明治15年には、タネが赤ん坊の長女たかを抱いておぢばへ帰ったとき、教祖は、たかの膿を持った一面の「クサ」を御覧になり、紙切れを取り出して、少しずつ指でちぎっては唾をつけて、一つひとつ頭にお貼りになった。大阪に戻り、2、3日経つと、ジクジクしたクサも、綿帽子をかぶったように浮き上がり、帽子を脱ぐようにご守護を頂いた話が残っている。四郎兵衛が「おさしづ」によって明治22年1月15日、船場分教会のお許しを得たその年の12月23日にタネも「おさづけの理」を拝戴している。

以上が、四郎兵衛夫妻に関する略歴である。『稿本天理教教祖伝逸話篇』に登場する四郎兵衛夫妻に関する逸話はこの「蔭膳」だけではなく、5.「流れる水も同じこと」22.「おふでさき御執筆」82.「ヨイショ」92.「夫婦揃うて」107.「クサはむさいもの」117.「父母に連れられて」123.「人がめどか」126.「講社のめどに」159.「神一条の屋敷」170.「天が台」184.「悟り方」198.「どんな花でもな」など数多くの逸話がある。そのなかでも、123.「人がめどか」では信仰者としての日々の実践目標でもある、有名なお言葉の「やさしい心になりなされや、人を救けなされや、癖、性分を取りなされや」を教祖より頂いている。

4. まとめ

この逸話から我々は何を悟るのかである。四郎兵衛ご夫妻にしてみれば、御苦勞くだされている教祖を想い、「誠真実」の心で何がなんでもご無事にお帰りいただきたいと願い、その一心で四郎兵衛は監獄所に通い続け、タネは自宅で蔭膳を据えて通られている。そのご夫妻のことを教祖はすべてご存知であり、教祖の立場からすればすべて「見抜き、見通し」であった。

新連載執筆のねらいと執筆者紹介

「音のちから—中国古代の人と音楽」

中 純子（天理大学国際学部教授）

音のもつ崇高なちから、不可思議なちから、それは今なお信じられているだろうか。いや、必ずしもそうとはいえないように思う。なぜなら、わたしたちは、風や雨、鳥のさえずりなどの自然界からの音のメッセージに耳を傾けるゆとりを持たなくなっているから。また、素晴らしい技能をもつ音楽家が演奏する音楽を賞賛することはあっても、その音楽が聞く者の心身にもたらす変化を明確に意識することは少ないのではなからうか。一日一日が慌ただしく過ぎていき、じっくりと物考える時間がない今、すこし立ち止まって、それを見つめてみたい。

こうした意図から、本連載では、音に対して敏感であり、音楽に対して敬虔であったであろう中国古代の人々の記録を取りあげていきたい。敏感と書いたが、彼らの時代の自然の音が今とさほど違っていたとは思えない。それゆえに、音に対する古代の人の反応から、音に対して人間が本来もっていた感性を見つめなおしたい。またすぐれた音楽を聞き分けるという点で、古代の人の耳が今の我々に比べて劣っていたとも考えられない。なぜなら、紀元前の文献資料を紐解けば、十二律や三分損益法などの音階理論の早期確立や、人間の心と音の関わりを説いた楽論の成熟などがうかがえるからである。それに加えて、紀元前500年あたりのものである編鐘など出土文物からも、中国古代にはかなりのレベルの音楽文化が開花していたことが知られるからでもある。

本連載では、古代中国の文献資料や残された文物のなかに、音や音楽に対する人間のありかたを探っていく。それが現代を生きる我々が音の世界をあらためて見直す契機になればと考えている。

2020年度宗教研究会（1月27日）

「宗教」を超える宗教活動の未来

福井良應氏（おてらおやつクラブ）

杉江健二氏（青少年養育支援センター「陽氣会」）

近年、さまざまな理由から貧困世帯が増加している。母親や子どもたちは、社会の「ひずみ」のなかで取り残され、孤立を深めている。

天理教では、これまで天理養徳院をはじめ、里親や災害救援ひのきしん隊などさまざまな支援活動を展開してきた。天理教は、常に社会問題に目を向け積極的に関与し、社会貢献活動を行っている。宗教者による社会貢献活動は、信仰者の宗教的情熱の発露でありながらも、必ずしも布教（宣教）とは直接に結びつかない活動にも拡大している。

宗教者のこうした支援活動は、既存の宗教観や「宗教」像では捉えきれない。宗教性を裡に秘めながら活動する宗教者による社会貢献活動は、「宗教」からの逸脱ではなく、現代社会に則した「宗教の新しいかたち」とみなすことも可能であろう。

この動きは、宗教が社会との接点のなかで、その関わりを新しく模索する動きでもある。

福井良應氏（おてらおやつクラブ）は、お供えされたお下がりを「おすそわけ」することで、子どもの貧困問題の解決を目指している。その取り組みが評価され、2018年には、グッドデザイン大賞を受賞した。

福井氏が指摘したように、おてらおやつクラブの取り組みは、信者から仏にお供えされた「お初」をおすそわけするのであって、お寺の余り物を配布するのではないということである。地域住民からも、活動が理解されはじめており、子ども向けのお菓子などのお供え物が増えてきている。「おすそわけ」を配るきっかけを作ること、地域で気になっていた子育て家庭を訪問する理由づくりにもなり、地域住民との交流も生まれている。

杉江健二氏（青少年養育支援センター「陽氣会」）は、不登校・引きこもりで悩んでいる子どもを預かって支援しながらも、保護者へのサポートを行っている。天理教は全国の里親の約1割、委託児童は約1.5割を占めているが、それでも全然足りない状況である。

杉江氏は、児童虐待の根本原因を解決するため、保護者支援事業「イライラしない子育て法」（CPA）講座を、名古屋市から業務委託を受けている。また、天理教の教会が主催し、教会を会場とした「お道のにおい」を醸し出した保護者支援事業（TFA）にも取り組んでいる。地域の「おたすけ場所」としての教会の姿である。“たすけられた”保護者が、“たすける”側になることで、社会問題を、地域社会との関わりから解決している。

おやさと研究所は、これからも、伝道の最前線としての「宗教の新しいかたち」にも積極的に取り組んでいく。（澤井真記）

第338回研究報告会（2月18日）

「高齢者介護福祉従事者の離職防止に資する支援ツールの作成」

北垣 智基（天理大学人間学部講師）

日本では高齢化の進展に伴い、介護福祉現場従事者（以下、現場従事者）の確保が社会的課題となっている。現場従事者の確保が困難な要因は様々挙げられるが、離職要因の一つとして共感疲労をはじめとする精神的ストレスの問題が指摘されている。離職防止のためには、こうしたストレスを低減させるとともに、ストレスを跳ね返す力としてのレジリエンスを高める必要がある。

上記の観点から、現場従事者が自らの共感疲労ならびにレジリエンスの状態について、セルフチェックを通じて把握することを可能とする支援ツールの作成を試みた。支援ツールは共感疲労ならびにレジリエンスの状態を測定する各30項目の質問に回答し、その結果を「良好」「平均的」「要注意」の3領域に色分けされたレーダーチャートに記入することで、自らの状態がどのレベルに位置するのかを把握することができる。実際に現場従事者が使用することで、自らの状態を振り返り、自己認識を深める効果があることが示唆された。今後は、介護現場において支援ツールを用い、さらなる具体的な対応策を検討していくこと等が課題として挙げられる。

天理大学おやさと研究所 2020年度「教学と現代」

「新型コロナウイルス時代の天理教の教えと実践」

世界的な感染拡大となった新型コロナウイルス COVID-19 は、私たちの暮らしを大きく変えました。マスク着用や「三密」の回避、また「新しい生活様式」の推奨など、これまでの生き方・暮らし方が根本から問い直されています。

さらに、信仰者にとっては、おぢばや所属教会に参拝できないもどかしさを感じています。私たちはこのコロナ禍の中であって、これまで当たり前だと思っていたことが、実は決してそうではなかったという気づきを得ました。

天理大学では2020年8月、ラグビー部寮での集団感染が起こり、またそれによって、心無い非難や差別も経験しました。しかし、この大きな節を“一手一つ”で乗り越えることができました。そこから見えてきた“一れつきょうだい”の教えについて、天理大学長でもある永尾教昭所長が、天理大学の事例を通じて基調講演をいたします。

続いて、佐藤孝則研究員が生物科学的な視座から、また澤井義次研究員が天理教学の立場から、それぞれ新型コロナウイルスの感染拡大をどう受け止め、コロナ禍の中でどう行動したら良いのかについて発題をいたします。

【日時】

2021年3月28日(日曜日)
13時30分～15時00分

【開催方法】 オンライン

【講師・演題】

基調講演：永尾教昭所長

「一れつきょうだいの教え—天理大学の事例をもとに—」

発題1：佐藤孝則研究員

「新型コロナウイルスの特性から考える」

発題2：澤井義次研究員

「『世界は鏡』のコスモロジーから考える」



天理大学おやさと研究所
2020年度「教学と現代」

2021年3月28日(日)
13時30分～15時

- ・永尾教昭「一れつきょうだいの教え—天理大学の事例をもとに—」
- ・佐藤孝則「新型コロナウイルスから考える」
- ・澤井義次「『世界は鏡』のコスモロジーから考える」

天理大学おやさと研究所 2020年度「教学と現代」
公開予定
1人が視聴しています・2021/03/28 に公開予定

Tenri Oyasato Institute
テンリ大学の宗教研究 23人
天理大学おやさと研究所
<http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/>

おやさと研究所のホームページをご覧ください。
13時30分よりライブ配信いたします。
上記QRコードから直接ご覧いただけます。

グローバル天理

第22巻 第4号 (通巻256号)

2021年(令和3年)4月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan